

古河文化見聞録

3通の書状をめぐって

5月のとある日、1本の電話が古河歴史博物館にかかってきました。聞けば、茨城県外の方で、骨董屋さんで古文書を手に入れたと。これが古河公方足利成氏の書状で、読めないので翻刻(活字にすること)して欲しいとの内容でした。「ほんとに成氏？」などと失礼ながら半信半疑の心持ちではあったのですが、「古河公方」と聞いては捨て置くわけにはいかないのが当館の宿命、何よりも興味津々で、「成氏の新出文書？」などとの妄想が膨らみ、「お役にたたないかもしれませんが」という前提条件のもとにお引き受けし、写真をお送りいただきたい旨をお伝えして受話器を置きました。すると数日後、ご依頼主からB5サイズ程度の封書が手元に届いたのです。ここではご依頼に対してどう調べていったのか、その過程を紹介します。

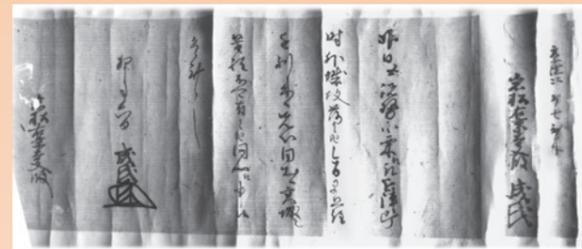
書状を調べる

さて届いた封書の中身はというと、文書の写真が3枚、それから文書を複写したと思しきB4サイズ用の紙を5枚ほど横に貼り連ねたものが入っていました。写真3枚は3通の書状をそれぞれ写したもので、古河公方足利成氏のものが2通、同じく足利晴氏のものが1通で、いずれも岩松右京大夫宛ての書状です。そして貼り連ねたコピーからすると、文書の現況は3通の文書がひとつの卷子に装丁されているらしいことがわかります。案の定、依頼主からの送り状には卷子である旨が記されていました。さらにそのコピーには、成氏書状2通のそれぞれの包紙(書状を包んだ紙)も含まれていました。

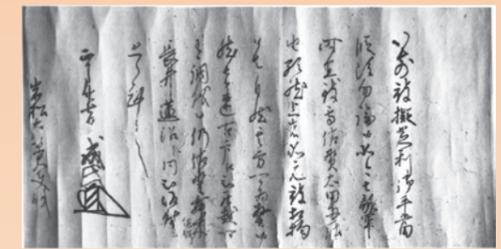
まず注目したのがそれぞれの書状の年月日です。というのも、一般に知られているもの

で、しかも古河公方文書となれば、『古河市史』資料編(以下『市史』)に掲載されているはずですが、資料編は大概編年(年代順)になっていますから、年月日さえわかれば、すぐに掲載されているか否かがわかります。はたしてこの3通の書状はどうかというと、なんと我が『市史』に掲載されているではありませんか。これでもう翻刻ということでは終わったようなものなのだと思います。左にあらざる。ここで注意しなければならないのが、当該『市史』は「正本文書」という史料を典拠として書かれているということです。すなわち、「正本文書」とは如何なるものか、ということを探さなければなりません。そこで登場するのが『国史大辞典』(吉川弘文館・以下『国史』)。それによれば、この正本文書は、福井市郷土歴史博物館(寄託)と内閣文庫に収蔵されていると。何が言いたいのかといえば、公的施設にあるものは、基本的に市井(骨董屋さんなど)には流出しませんから、この3通の書状と『市史』が使用している正本文書の書状とは別物であるということなのです。すなわち見ている史料がそれぞれ違うのですから、『市史』の翻刻と3通の書状を照合する必要があります。すると②の書状には、いくつかの文字の違いがありました。さらに『国史』には、享保16(1731)年に宇都宮藩浪人正木新五左衛門の娘がこの文書を徳川吉宗に献上したところから「正本文書」の名があるとして

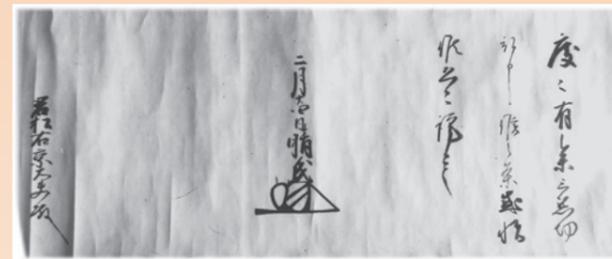
「今日この原本は一部を除いて所在不明で、伝本は献上の前後に作成された写本がほとんどである。新田洋子所蔵(福井市郷土歴史博物館寄託)の『正本文書』は卷子三巻の検注帳類二十八点の原本と二百二十八点の写本から成る。」



▲①足利成氏書状(4月6日付)



▲②足利成氏書状(正月27日付)



▲③足利晴氏感状

と解説されています。ほとんどが写本で、原本(正文)は一部を除いて所在不明なのだ。では現存するその一部の原本はというと、『群馬県史資料編5』によれば、上述の卷子3巻の検注帳類28点と書状類4通だと。そして、吉宗への献上後の原本は、元文3(1738)年までには10巻有余の卷子に表装され、將軍家の文庫に保管されたとしています。すなわち原本は卷子になっている？ 何とも示唆的ではありませんか。この書状も卷子に仕立てられています。ただ、200点超にも及ぶ原本すべてを10巻に表装するとすると、単純に1巻あたり20点くらい収載されていなければならない計算になります。そもそもすべてが卷子に仕立てられたのか否か？ という問題もあるのですが、結論的にいえば、当該卷子は將軍家によって表装された卷子そのものではないと思います。が、売買目的、つまり切り売りするために改装された(その時期は不明)卷子である可能性はあります。もしそうならば、この書状3通は原本ということになるのですが、まあ、想像に想像を重ねるのはこれくらいにしておきます。

書状の内容

では最後に書状の内容に少しだけふれておきます。①は(享徳4年)4月6日付けの成氏書状です。昨日5日に小栗(現筑西市)に進軍し、すぐに敵方の外城を攻落した旨の報告を本日朝方に受けたので、実城(本城)も簡単に攻略できるだろうと味方に話している、というものです。5日の出来事を6日に知り、その日のうちに味方に書状を認めています。そしてその書状の包紙への書き込み「享徳四卯七到

来」によれば、宛先には7日に届いています。宛先は岩松右京大夫(持国)で金山城主、金山城は現在の群馬県太田市に所在したので、成氏の拠点古河城から金山城まで1日で届いたことが判るのです。直線距離でおおよそ30キロくらいでしょうか。また、書状には月日しか記されていませんが、これにより発給年次も判明します。書状到着の記録をしたのが持国なのか、はたまたその家臣なのかは判りませんが、こんな几帳面な人物には感謝です。

こうしたちょっとした記録が当時の様子を垣間見せてくれます。②は(享徳5年)正月27日付けの成氏書状です。足利への出陣はもっともですが、佐貫莊(群馬県南東部)や太田莊(埼玉県北東部)に敵が進軍してきたときの対処もあなたの役割ですから、速やかに古戸(現太田市)に赴いて軍勢を調べてください。このことは佐野・舞木・長井・蓮沼氏にも伝えてあります、という内容です。つまり成氏から持国への出陣要請といったところでしょうか。なお、これにも包紙がついていて、到来年次が書かれていますが、この書状のものではありません。①と②は享徳の大乱(享徳3年～文明14年)の時期で、古河公方対関東管領上杉氏の争いです。従って書状に見える「敵」は上杉勢ということになります。③は足利晴氏から持国に与えられた感謝状です。2月14日付けですが、発給年次は不明です。

当館にはさまざまなお問い合わせが、市民のみならず市外の方々からも数多く寄せられます。こうしたことに対応することもまた、博物館の重要な役割のひとつです。

古河歴史博物館学芸員 臼井公宏

※次号(平成30年1月号)は休載します